

入試成績の追跡研究(2)

——入試成績と学業成績との関係および評定平均値平均と
学業成績との関係について——

小 高 晋 二

1. はじめに

現在の学校教育全体の中において、大学の入学試験の持つ意味合いは依然として大きいといえる。なぜならば、高等学校以下の学校教育が、極言すれば、大学への入学を究極の目的として組み立てられているとさえいえるからである。本来ならば、それぞれの教育段階にはそれぞれの教育目的があり、それぞれ完成教育であるべきである。そして、それぞれの段階を踏まえた上で、結果として上級の教育段階に進学できるというのが筋であろう。それにもかかわらず、現代の学校教育は、上級段階の学校がそれぞれ目的化しており、そこに入学するためにその下の段階の教育が存在するとさえいえるところに現在の教育の大きな問題があるのではないだろうか。つまり、簡単にいえば、現在の学校教育の一般的最高段階を大学とした場合、それ以下のすべての段階の学校教育は究極目的である大学に入ることを向けて収斂されていくとさえいえるのである。従って、高等学校においてはもとよりのこと、中学校においても、さらに極端な場合には小学校やそれ以下の段階から大学入試へ向けての受験教育体制がとられる場合すらあるのである。

このような教育体制は、それ自体としても大いに反省されて然るべきであるのに加え、教育の内容の面からも知育偏重学力重視ということが一般的に行なわれ、従って、教育本来の目的を全体的な人間形成として捉える立場からすれば、教育を二重の意味で歪めているということになるのである。そして、この二重の意味で教育を歪めている元凶が現在の大学入試制度にあるとすれば、入試の方法を小手先だけでなしに、抜本的に改める必要があるということになるのではないだろうか。つまり、現在一般にまだ多くの有力大学で行なわれている学力試験重視の入試方法こそが改善される必要があるということである。54年度より実施された国公立大学での共通1次試験制度は、現在の受験教育体制といわれるものを改善するべくとられた方法なのであるが、それが有効に作用し得るには、それをどのように利用するかにかかっているといえるだろう。つまり、共通1次が単なる足切りであり、2次試験もやはり学力試験だけという選抜方法であれば、受験生は、同種の試験を二重に受けるだけのことであり、ただ負担が多くなるだけのことであり、共通1次を有効にするためには、学力試験とは別種のフィルターをも課すことが大切なのではないだろうか。例えば、調査書の重視、面接、小論文などである。このようにして、いろいろ

な角度から判定してこそ高等教育にふさわしい、それぞれの大学の求める学生が得られるのではないだろうか。その意味からすれば、宮教大をはじめとする、実技、面接、小論文などの実施や、推せん入学制度の導入は大いに意味のあることと思われる。

さて、本研究は、前回に引き続き、本学において主として学力試験のみ⁽¹⁾によって入学した学生がその後の学業成績においてどのような成果を取めたかを調査し、併せて、高校時代の成績（調査書）との関係をも明らかにすることを目的とするものである。

この調査の結果を結論的にいえば、主として学力試験だけで入学者を選抜した場合、その入試成績はその後の学業成績とは必ずしも関連を持たず、学業成績はむしろ高校時代の成績に大きく関連していたということである。このような調査結果⁽²⁾が大学入試のあり方について考える場合のひとつの参考になれば幸いである。

なお、本研究にあたって、昭和54年度本学特別研究助成費を受けたこと、および、資料の閲覧にあたって学校当局にいろいろご配慮いただいたことを付言したい。

2. 対 象

今回の調査の対象は前回（昭和52年度入学者で54年3月卒業者）に引き続き昭和53年度入学者で55年3月に卒業した者とした。但し、前回と同様に、前年度入学者でありながら休学等のために53年度に編入された者や、退学・休学等により2ヶ年間の成績を残さなかった者、また、入試を受けていない優先入学者はこの調査の対象から除外した。この結果、対象となった学生は合計で474名、内訳は、本学の設置学科別にそれぞれ文科141名、家政科175名、生活芸術科158名であった。

3. 資 料 と 方 法

(1) 資 料

資料として用いたものは前回と同種のもので、昭和53年度本学入学判定資料、学生成績表および高校より送付される調査書である。

(2) 方 法

方法も前回と同様であるが、要点だけを述べれば、入試の得点に関しては入試判定資料に記載された得点をそのままその学生の得点として用い、また、高校在学中の成績も調査書に記載されている評定平均値平均（各科目別評定平均値を平均したもの）をそのままその学生の得点として用いた。但し、本学在学中の学業成績に関してはこれを次の方法で得点化した。すなわち、2ヶ年間に履修したすべての科目に関し、優（80点以上）と評価されたものを3点とし、以下、良（79～70点）を2点、可（69～60点）を1点、不可（59点以下）を0点とし、それぞれ科目数に

乗じた積の和を科目数で除した商をその学生の得点とした。⁽³⁾ 但し、教職専門科目についてはこれを除外した。

この結果、入試に関する最高は210となり、最低は2となる。⁽⁴⁾ また、学業成績の最高は3.00となり、最低は0.00となる。さらに、調査書の場合は最高5.0であり、最低は1.0である。また、同一得点段階に2名以上の者がいる場合にはその平均を算出した。⁽⁵⁾

これら得点化されたものを比較対象別に左右の縦軸に配置し、それぞれを線で結び、その交差の具合を見ることによって相互の関係を検討してみた。

4. 結 果

(1) 入試成績と学業成績との関係について

図1～3は入試成績と学業成績との関係を科別に表わしたものである。すなわち、それぞれの図は、左軸に入試総合得点を、右軸には学業成績を表わしてあり、左軸において各得点段階別にまとめられた学生が2ヶ年後の学業成績においてどのような結果となったかを線で結んであるわけである。なお、中央の太線は、参考として、入学者の入試総合得点の平均と入試入学者の学業成績の平均とを結んだものである。従って、入試において高得点をあげた者は、学業成績においても良い成績を残し、また、入試において成績の悪かった者は、学業成績においても芳しくないとは仮定すれば、両軸を結ぶ線は平行あるいは平行に近い形となるはずである。

図1(文科)を見てみよう。まず気が付くことは、得点上位者に右下りの線が多く、中位、下位者に比較的右上りの線が多い結果、線が複雑に交差しているということである。これは、要するに、入試の成績は良かったにもかかわらず、学業成績は期待したほどの成果をあげなかった者が多かったということと、逆に、入試の成績は良くはなかったが、学業成績は期待した以上の成果をあげた者が多かったということの結果を示しているわけである。特に、グループ㊸の場合など、9名の平均ではあるが、入試においては抜群の成績をあげながら、学業成績においては全体の平均を僅かに上回る程度の結果しか残していないということであり、またグループ㊹の場合においては、僅か2名の平均ではあるが、入試においてかなり上位の成績でありながら、学業成績は最下位という結果に終わったということである。一方、グループ㊺の場合は入試において得点がかなり低く、学業成績においても芳しくないという結果を示している、これらの結果を前回の調査と比較してみると、大体において同様の傾向であったが、若干異なる点は前回の調査に比して平行な線が少し多いということである。

次に図2(家政科)を見てみよう。図1より線の交差がさらに複雑であるといえるが、傾向としては図1と同様の結果であった。すなわち、グループ㊸は抜群の入試成績にもかかわらず、学業成績は期待されたほどでもなく、グループ㊹の場合なども入試においてはかなり上位でありながら、学業成績の方は最下位に近い結果であった。また、グループ㊺は入試において成績が悪く、

図1 入試得点と学業成績との関係(1)
文科の場合 (141名)

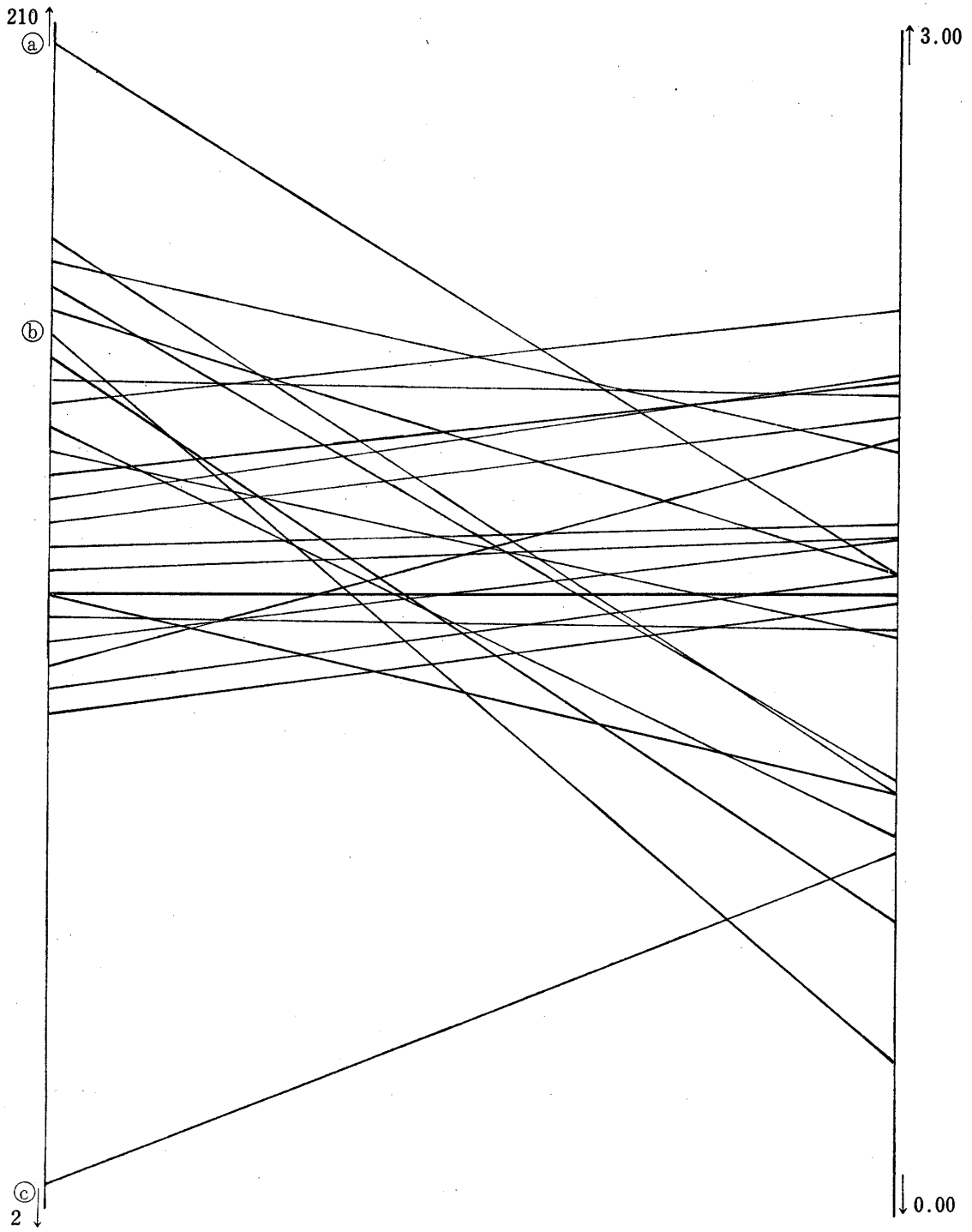


図2 入試得点と学業成績との関係(2)
家政科の場合 (175名)

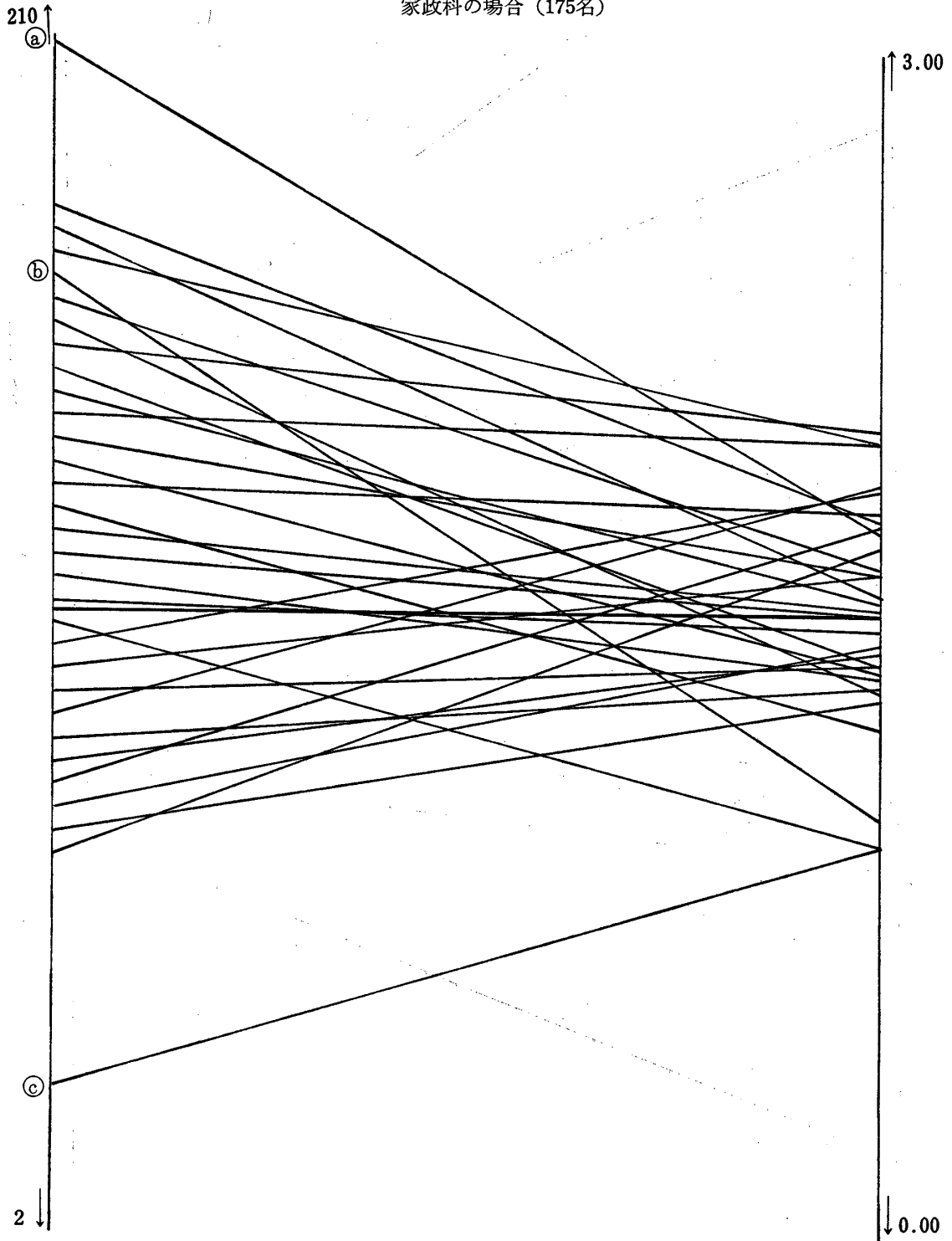
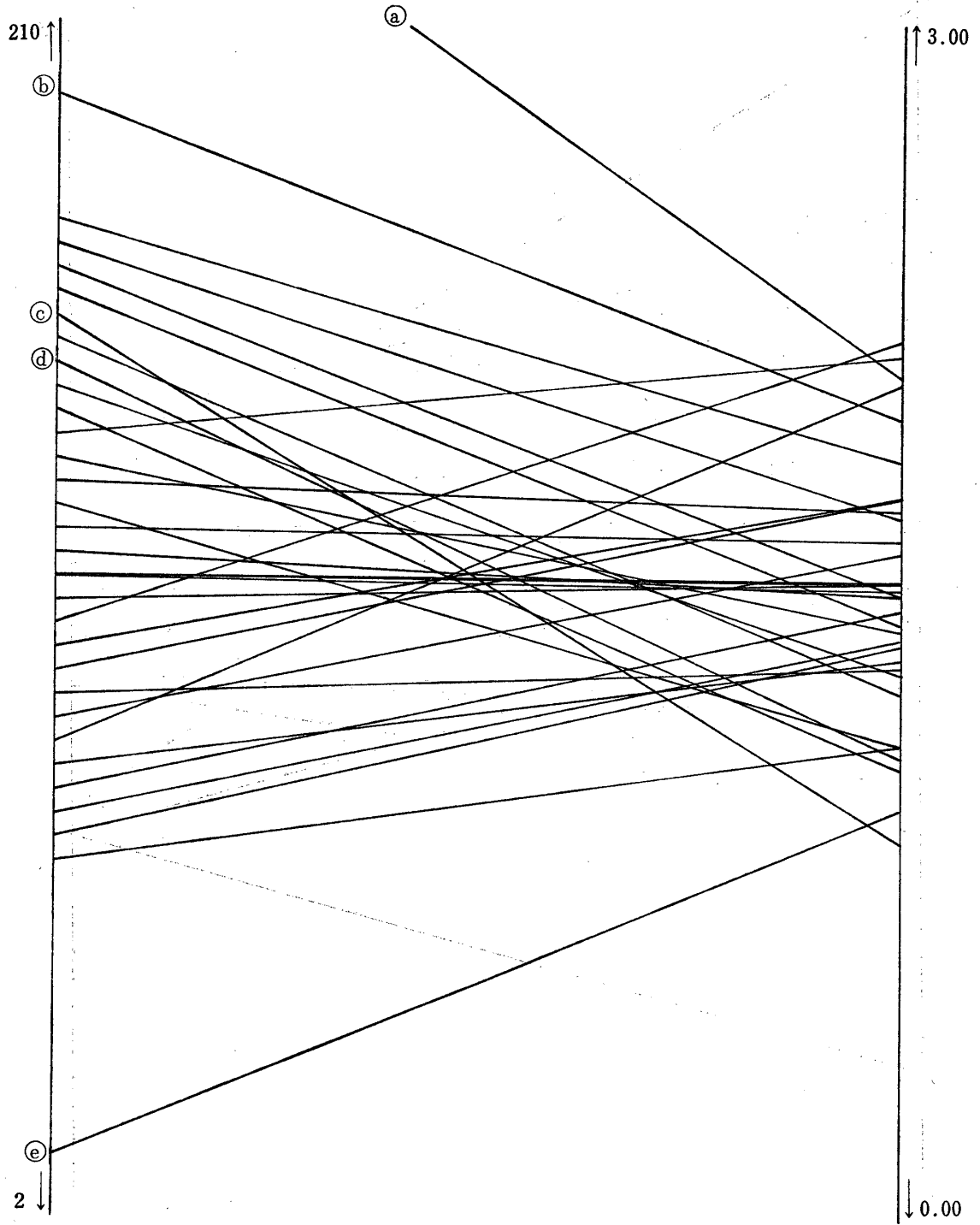


図3 入試得点と学業成績との関係(3)
生活芸術の場合 (158名)



学業成績においてもまた悪いということであった。

図3（生活芸術科）の場合はどうであろうか。前掲図1，図2と同様に線の交差は複雑である。しかし，前2図に比して異なる点も見られる。すなわち，入試において成績の良かったグループ④⑥が学業成績においても上位を占めている点である。しかしながら，グループ③やグループ①に見られるように，入試成績が比較的良かったにもかかわらず，学業成績が最低あるいは最低に近い場合や，グループ③のように入試で成績の悪かった者が学業成績においてもやはり悪い成績しか残せなかったという点などは，前2図と同様であった。

以上3図に共通している点は，線の交差が複雑であって，概して入試の成績はその後2ヶ年間の学業成績を予想しなかったということであり，また，入試において平均得点をかなり下回ったグループの場合には，結果としても学業成績が悪いということであった。

ところで，図1～3は，左軸の各得点段階に1名でも該当者があれば，すべて線で表わしてあるので，線の交差は複雑になっているわけである。そこで，より正確な傾向を知るために，各得点段階において該当者が4名以上いる場合に限っての図を作ってみた。それらが図4～6である。結果はどうであろうか。成程，前掲図1～3に比較すれば，いくらか簡略化された感はあるものの，依然として線の交差が多いことには変わりがないようである。図4（文科）のグループ④や，図6（生活芸術科）のグループ④⑥などは，入試においては好成績でありながら，学業成績においては最下位，あるいは最下位に近い成績しか残していないのである。一方，図4のグループ③や図5（家政科）のグループ④⑥，図6のグループ③などは，入試成績においては平均以下の成績であったのに，学業成績においては上位あるいは最上位の成績を残したという結果であったのである。もちろん，図4のグループ④や図5のグループ④のように，入試成績も良く学業成績も良いというグループや，図6のグループ④のように，入試成績も悪いし学業成績も悪いという例もあるが，それらはむしろ少数派であって，全体としてみれば，やはり，入試成績と学業成績との関係は密接であるとはいえないという結果であった。これらの結果は，前回の調査結果とほぼ同一であるといえる。

（2） 評定平均値平均と学業成績との関係について(イ)

次に，前回の調査と同様に，学業成績と高校在学中の成績との関係についても調査してみた。図7～9がそれである。この場合には，左軸に調査書の得点を，右軸には学業成績を配してある。すなわち，左軸の各得点段階ごとに該当者が何名いるかを調べ，それぞれ得点段階別に平均の学業成績を算出して線で結んだわけである。中央の太線は入学者の調査書得点の平均と学業成績の平均とを結んだものである。図7は文科，図8は家政科，図9は生活芸術科の場合である。

これら図7～9を見てすぐ気がつくことは，入試成績と学業成績との関係を表わした前掲図1～3に比して平行線が非常に多いということである。もちろん，線が交差していないというわけ

図4 入試得点と学業成績との関係(4)
 文科で1得点段階に該当者が4名以上いる場合

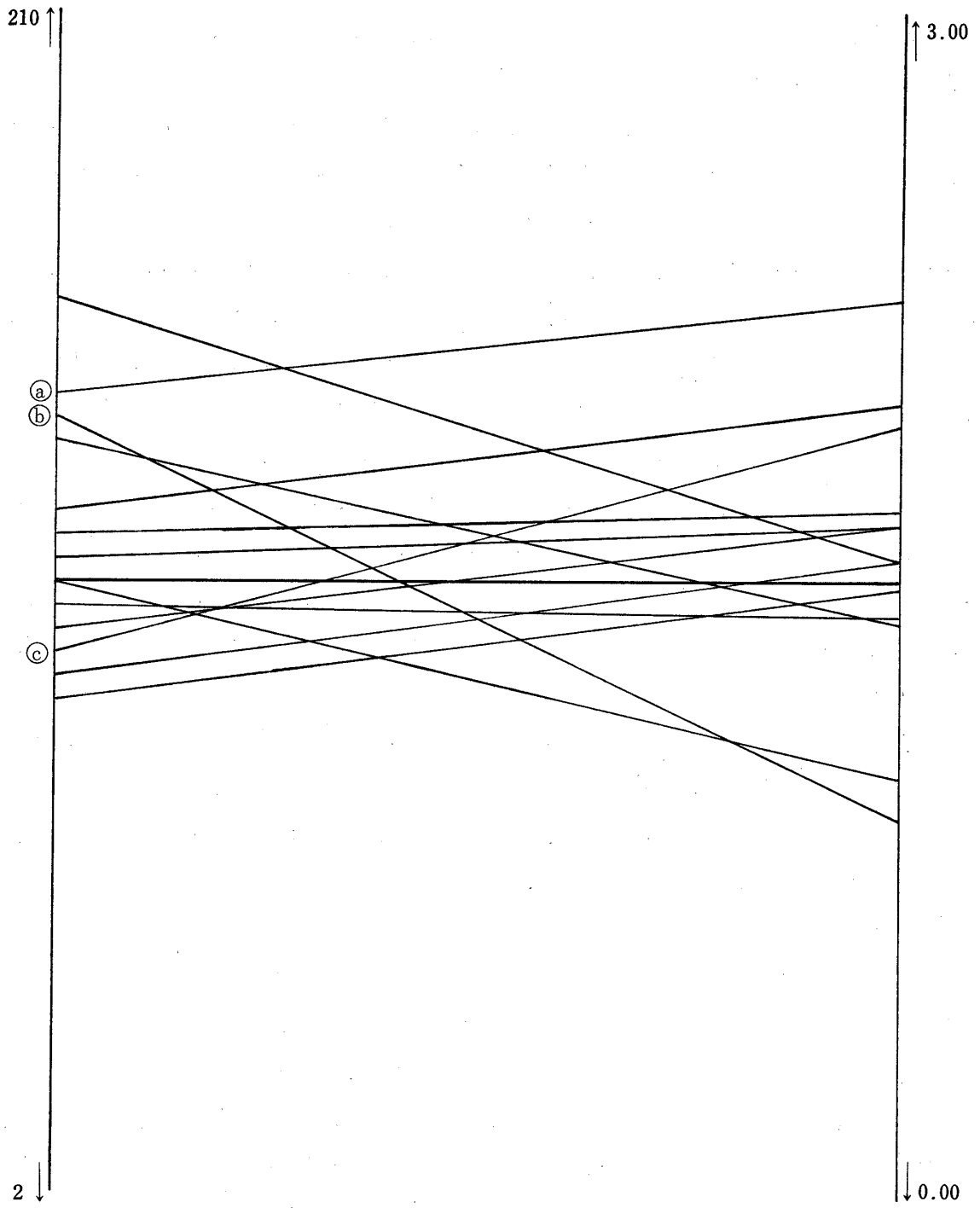


図5 入試得点と学業成績との関係(5)
家政科で1得点段階に該当者が4名以上いる場合

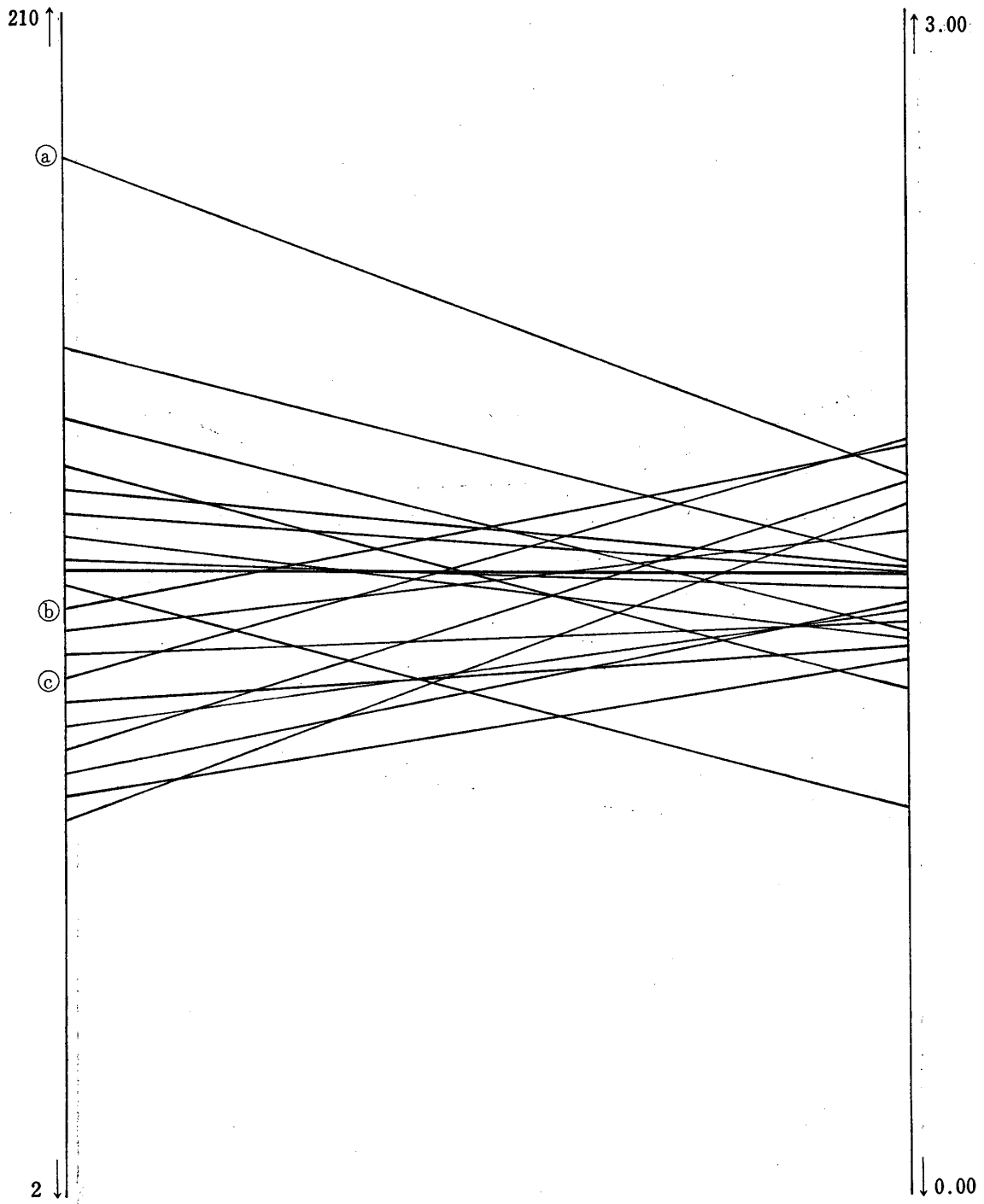


図6 入試得点と学業成績との関係(6)
生活芸術科で1得点段階に該当者が4以上いる場合

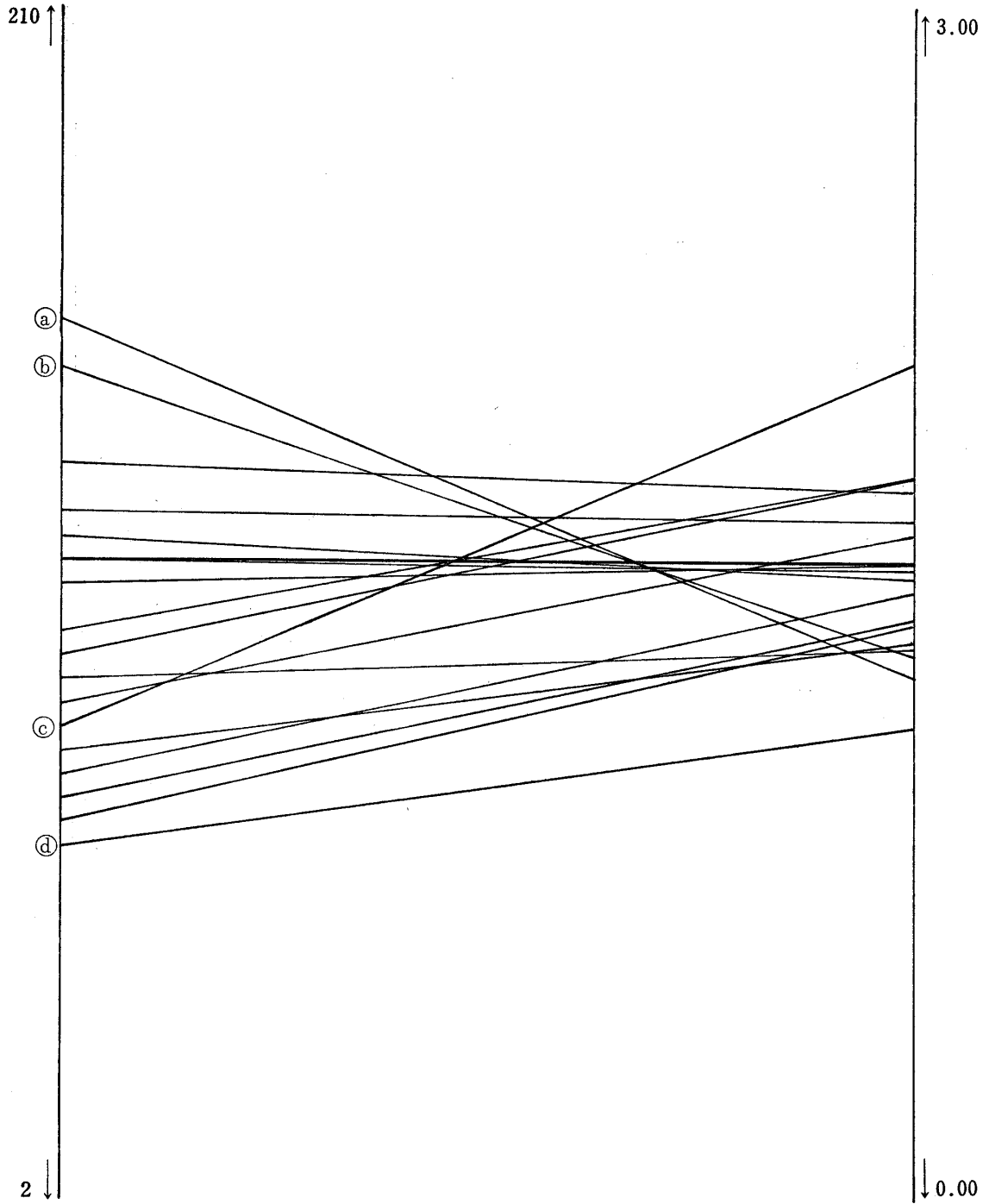


図7 評定平均値平均と学業成績との関係(1)
文科の場合 (159名)

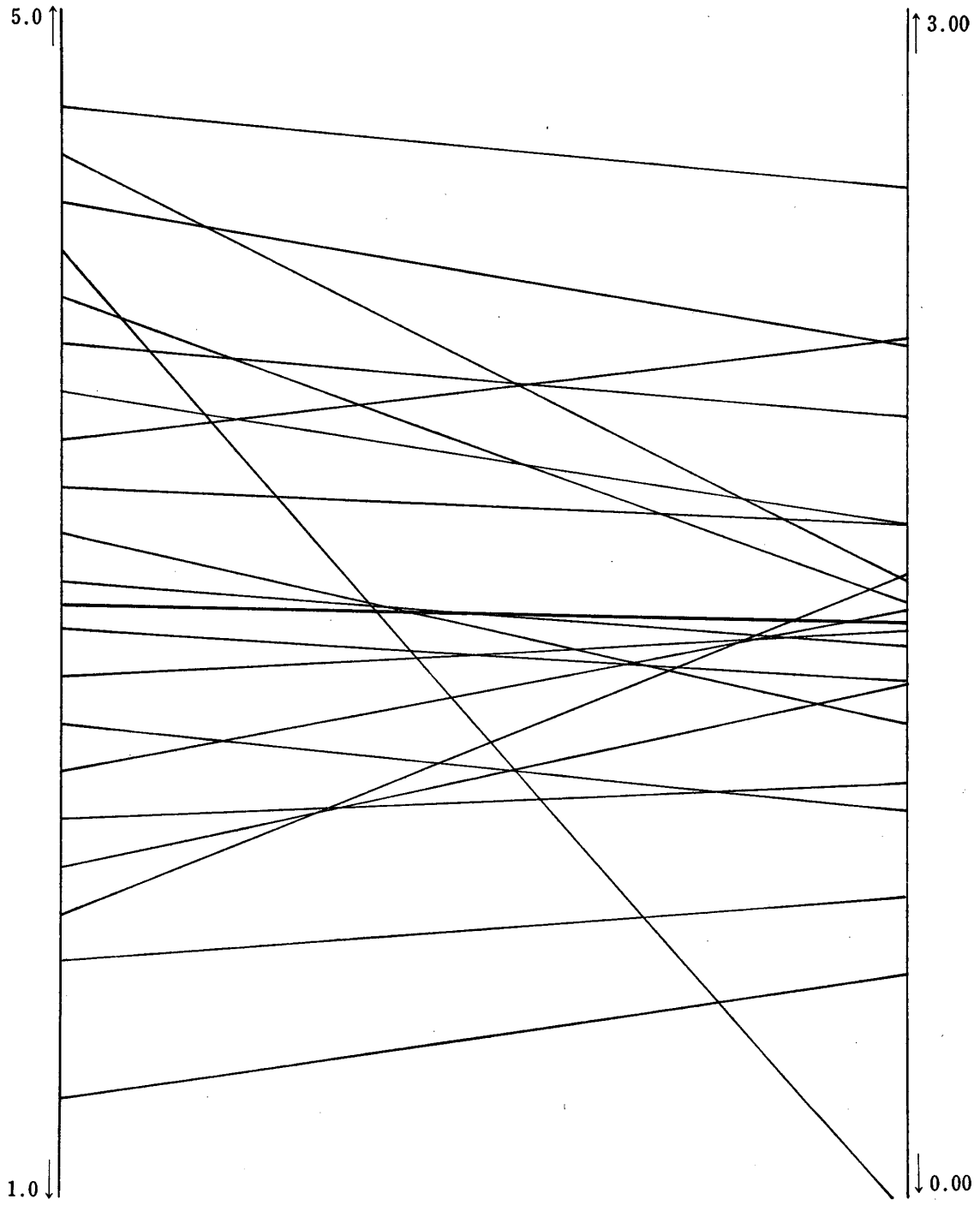


図8 評定平均値平均と学業成績との関係(2)
家政科の場合 (175名)

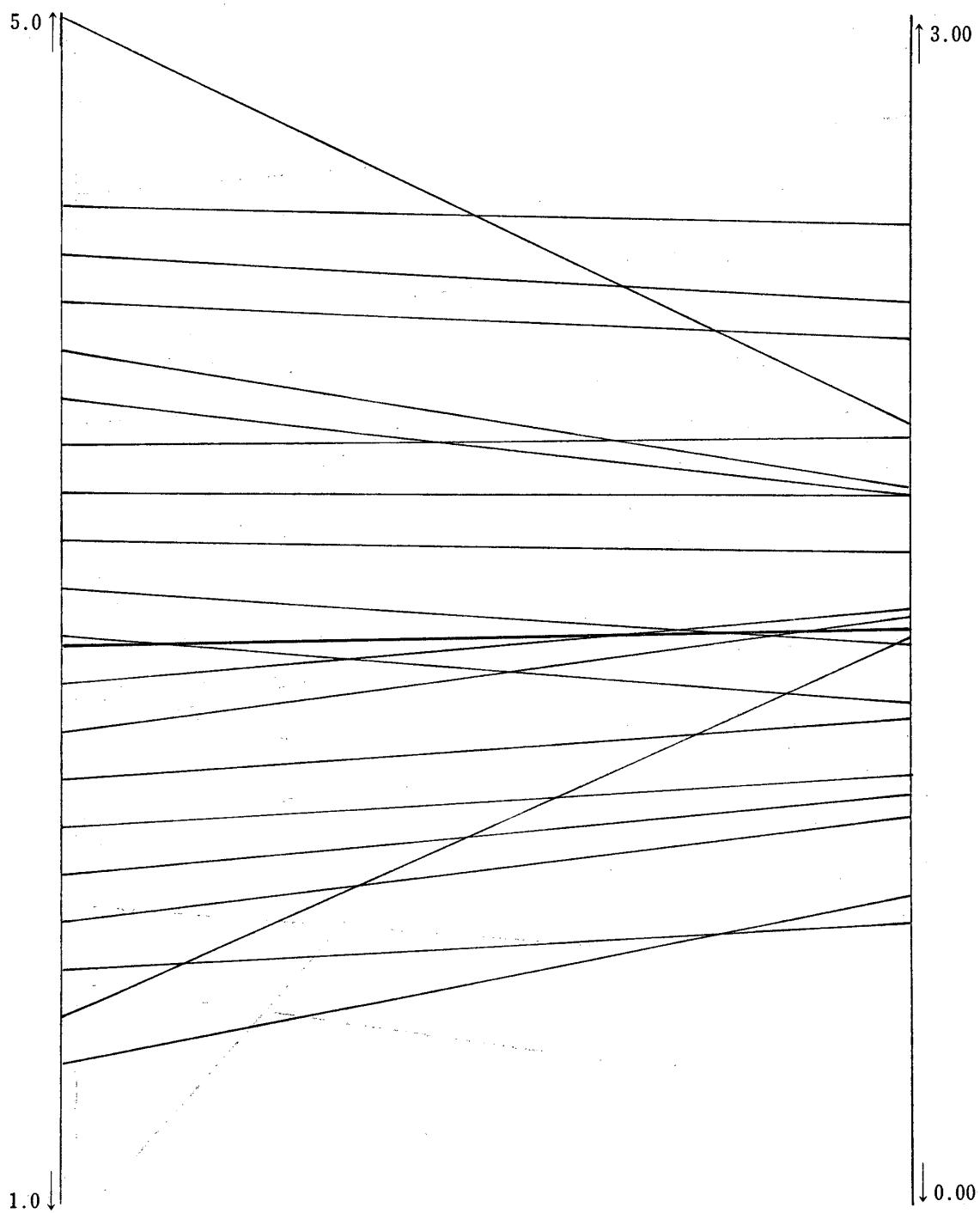
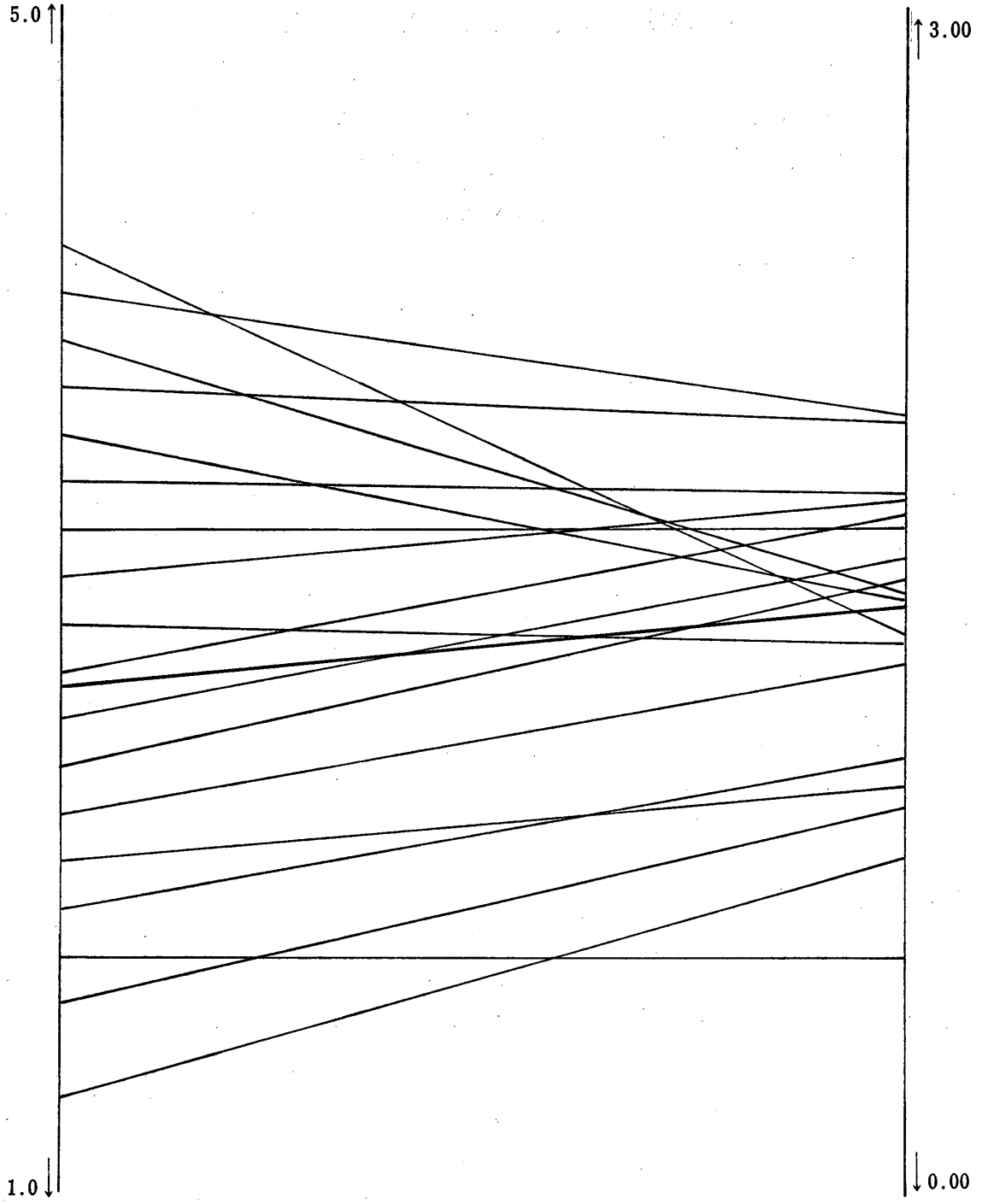


図9 評定平均値平均と学業成績との関係(3)
生活芸術科の場合 (134名)



ではないが、いくつかの例外を除けば、線の交差によってできる角は鈍角でなく鋭角である。つまり、これら図7～9の示す意味は、一言にしていえば、各科とも調査書の成績はかなりの程度においてその後の学業成績を予測していたということなのである。

さて、これら図7～9の中から前掲図4～6にならって左軸の各得点段階に該当者が4名以上いる場合に限って作成したのが図10～12である。こうしてみると一層各線が平行あるいは平行に近いことがわかる。図10（文科）の場合、左軸（調査書）の得点段階別に上位、中位、下位の3グループに分けてみると、上位グループは平均して学業成績においても上位グループを形成し、中・下位グループは依然として中下位のままなのである。また図11（家政科）の場合は、図10と同様に左軸の得点段階に従って3分してみると、もっと明確な結果が出たのである。すなわち、調査書得点において上位グループは学業成績においても上位、中位グループは同じく中位に、下位グループは下位位となったのである。図12（生活芸術科）の場合はどうであろうか、これも左軸の得点段階別にグループ分けをし、その学業成績を調べてみると、上・中位グループは上・中位グループを、下位グループは下位グループを形成するという結果になったのである。

これらの結果の示すところは、要するに、高校時代の学業成績はかなりの程度においてその後の学業成績を予測したということなのである。これらの結果も、前回の調査結果とほとんど同じである。従って、2ヶ年間の学業成績の結果という観点だけからすれば、入試の成績というのは、その場限りの、一発勝負的な偶然性の高いものであったといえるのではないだろうか。

もちろん、厳密にいえば、各個人個人によって履修科目の組み合わせや、科目担当教員の相違があるわけだから、全く同等には比較できないわけではあるが、いくつかの必修科目や選択必修科目は共通のものであり、また、自由選択科目もある一定のわくは決っているわけだから、共通する部分はかなり多いと考えられるわけである。それゆえ、この種の調査によっても、一般的な傾向を見ることはできると考えられるのである。

（3） 評定平均値平均と学業成績との関係について(ロ)

次に、これも前回の調査と同様に、評定平均値平均と学業成績との関係を前項とは違った観点から調べてみた。すなわち、前項においては、調査書の評定平均値平均が、例えば、4.0だとすれば、どの高校の出身であるかは問わずに一括して4.0としてまとめて取り扱ったわけであり、従って、いわゆる高校間の格差というものは全く無視したわけであるが、この項ではいくつかの学校群別に分けて、評定平均値平均と学業成績との関係を調べてみたわけである。つまり、この作業によって、学校間の格差に関する何がしかの資料が得られると考えたからである。もしこの作業によっても各線が平行あるいは平行に近い形になれば、その学校群にあっては、どの高校の出身であっても、平均的には調査書の評定による学校差はあまりないということになるし、もし、学校群によって線が複雑に交差すれば、同じ評定であっても高校間に差があるのではないかと推

図10 評定平均値平均と学業成績との関係(4)
 文科で1段階に該当者が4名以上いる場合

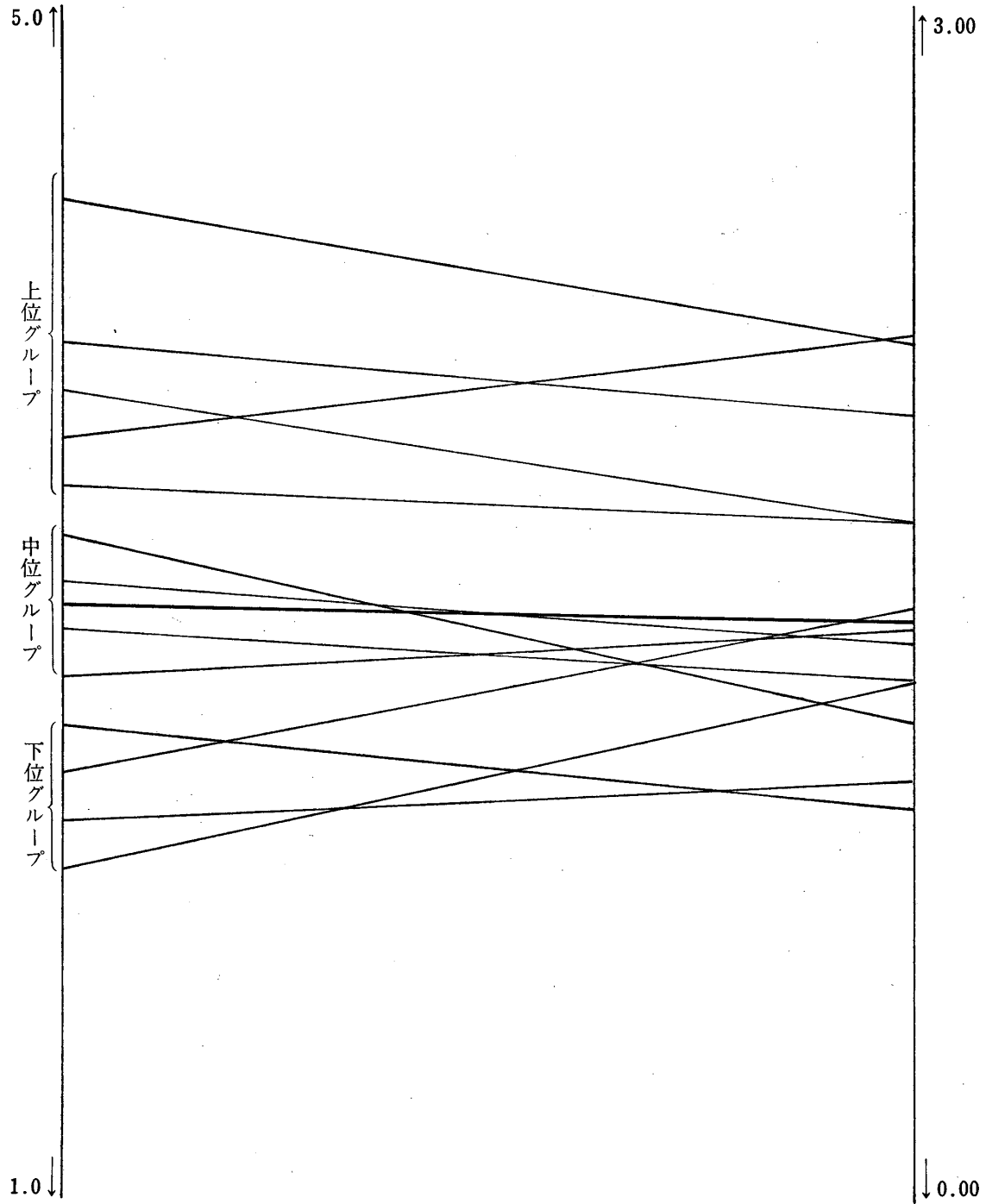


図11 評定平均値平均と学業成績との関係(5)
 家成科で1得点段階に該当者が4名以上いる場合

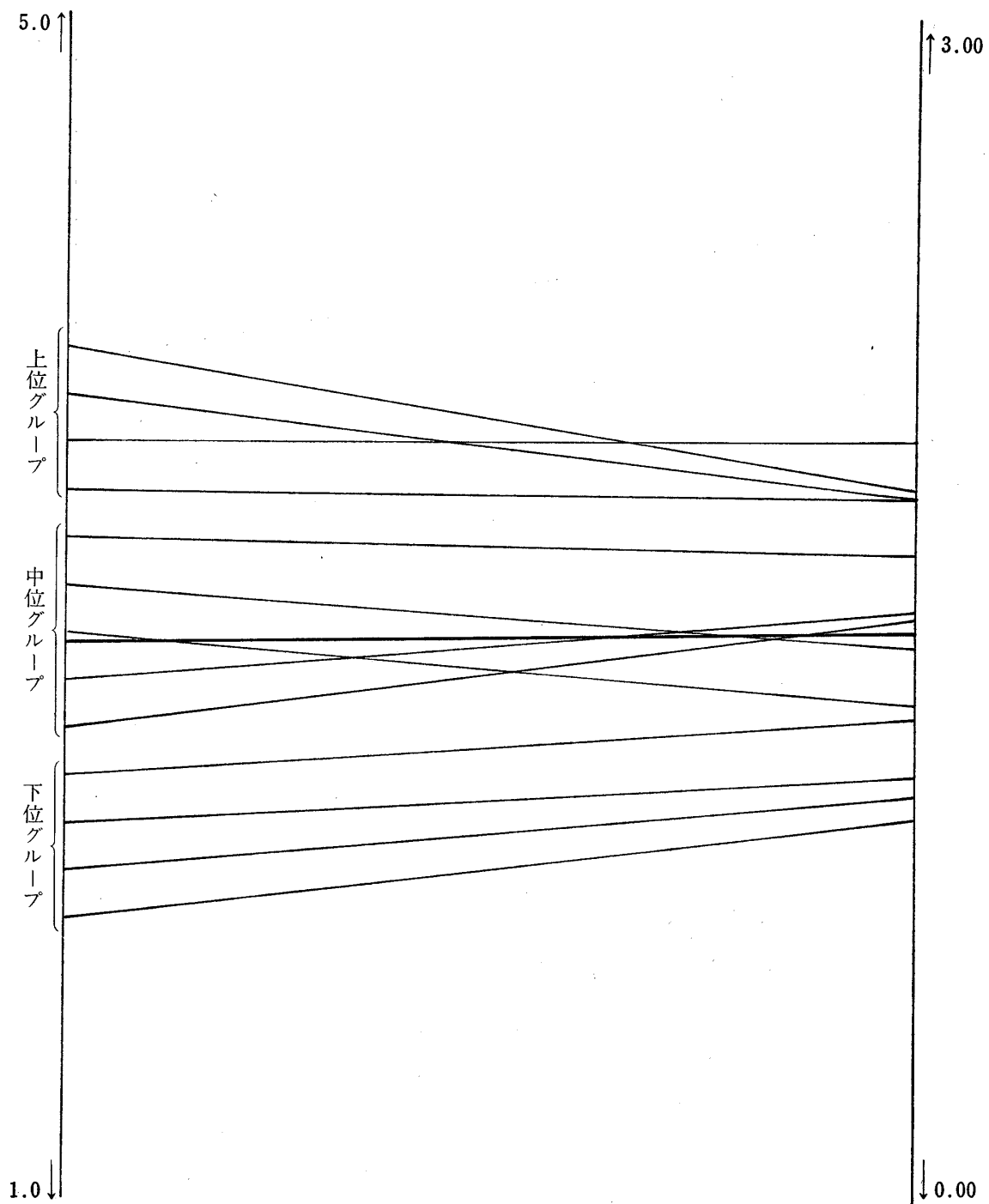
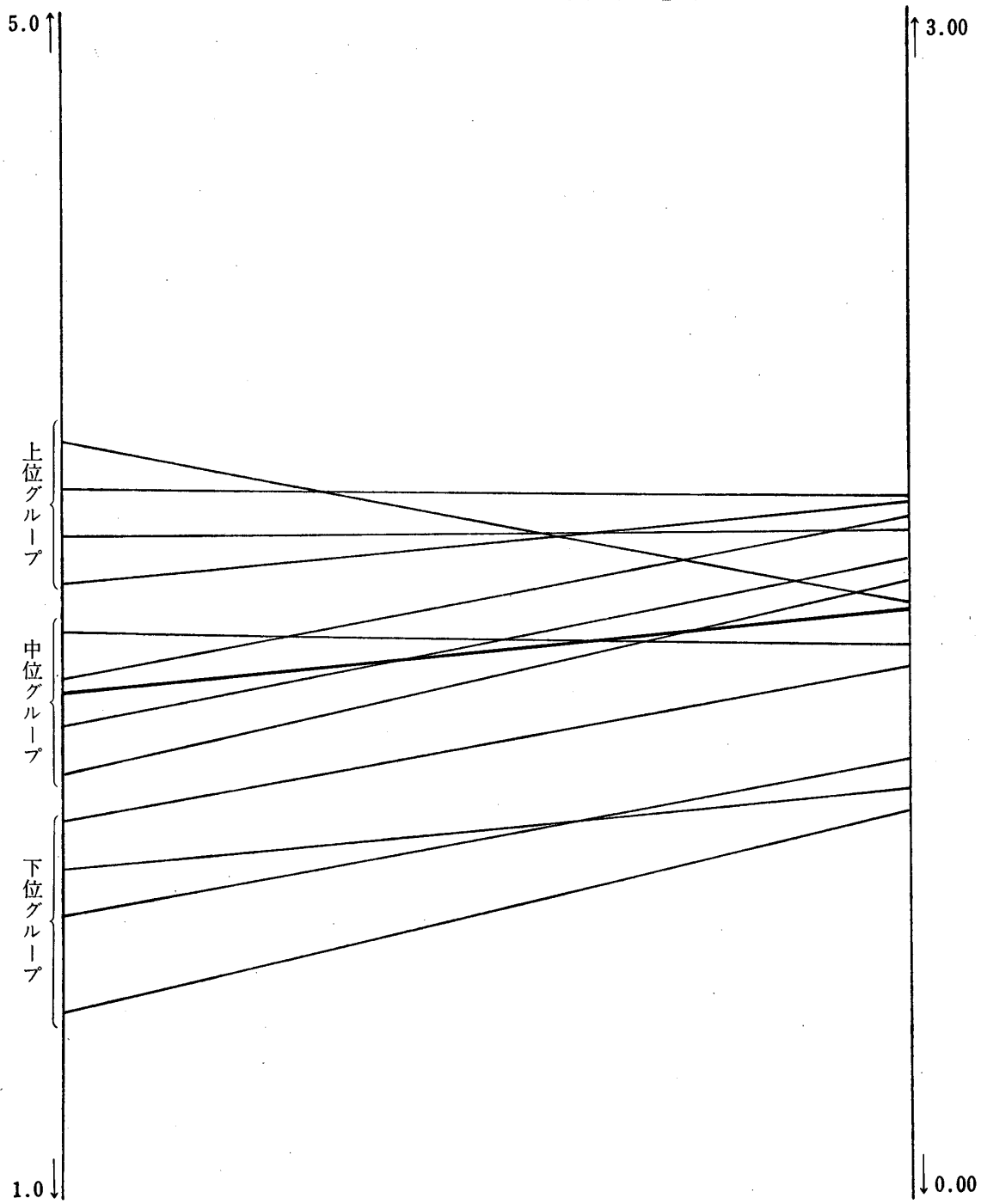


図12 評定平均値平均と学業成績との関係(6)
生活芸術科で1段階に該当者が4名以上いる場合



定されるということである。学校群は便宜上前回と同様、(A) 都内公立校出身者、(B) 都内私立校出身者、(C) 都外公立校出身者、(D) 都外私立校出身者に分けた。それぞれ該当する人数は(A) 152名、(B) 83名、(C) 198名、(D) 42名であった。これら学校群別の評定平均値平均と学業成績との関係を図にしたものが図13～16である。もちろん、このように学校群にすると、履修科目の異なる3科をまとめることになるので、問題があるとは思われるが、3科の学業成績の平均を調べてみると、文科と家政科は全く同一得点であり、これら2科と生活芸術科との平均の差は0.02であるので、有意差とは考えずに作業を進めたわけである。図は前項と同様左軸に調査書の得点を右軸に学業成績の得点を配してある。中央の太線は各学校群の平均を示し、破線は全体の平均を示している。

まず図13（都内公立校）を見てみよう。英干の例外を除けば、線は平行するか平行に近い形であり、しかも少し右上りの線が多い。これは、つまり、都内公立校出身者の場合、高校時代に学業成績の良かった者は、本学においても良い成績を残し、反対に、成績の悪かった者は、本学においても成績が芳しくなかったという結果を示しているわけである。また、中央の太線と破線の関係でいえば、都内公立校出身者の場合、全体的にみれば、調査書得点に比して学業成績は良かったということである。

次に図14（都内私立校）を見てみよう。前掲図13に比して線の交差が多く複雑である。これは要するに、都内私立校出身者の場合、高校時代の学業成績は、全体としてみれば、必ずしも本学の学業成績に反映しなかった者が多いということを示しているわけである。つまり、高校時代良い成績だからといって必ずしも本学で良い成績をあげたというわけではないし、逆に、高校時代に成績が悪かった者でも本学で良い成績を修めた者がかなりいたということである。また、全体の平均値（破線）との関係からすれば、都内私立校出身者は平均して調査書相応の学業成績を残したということである。

さらに図15（都外公立校）を見よう。これを見ると平行線の多いのと同時に何本かの急角度の右下り、および右上りの線が目につく。これら急角度の右下り、右上りの線に限っていえば、その意味するところは、調査書の成績が本学においては全然あてにはならなかったということである。反対に、平行線に関していえば、調査書の成績が忠実に本学の成績に反映したということである。また、全体の平均値（破線）との関係では、都外公立校出身者は、都内私立校出身者と同様に、調査書相応の成績を残したといえるわけである。

最後に図16（都外私立校）を見よう。これは図14（都内私立校）に似てやはり線の交差が複雑である。右下りのもの、右上りのもの、中央太線に平行のものなど線は様々である。従ってこの場合も、調査書の成績が本学の成績に忠実に反映したとはいえないわけである。また、全体の平均値（破線）との関係では、都外私立校出身者の場合は、平均してみれば、調査書の成績ほどには良い成績を残さなかったという結果であった。

図13 評定平均値平均と学業成績との関係(7)
都内公立校出身者の場合 (152名)

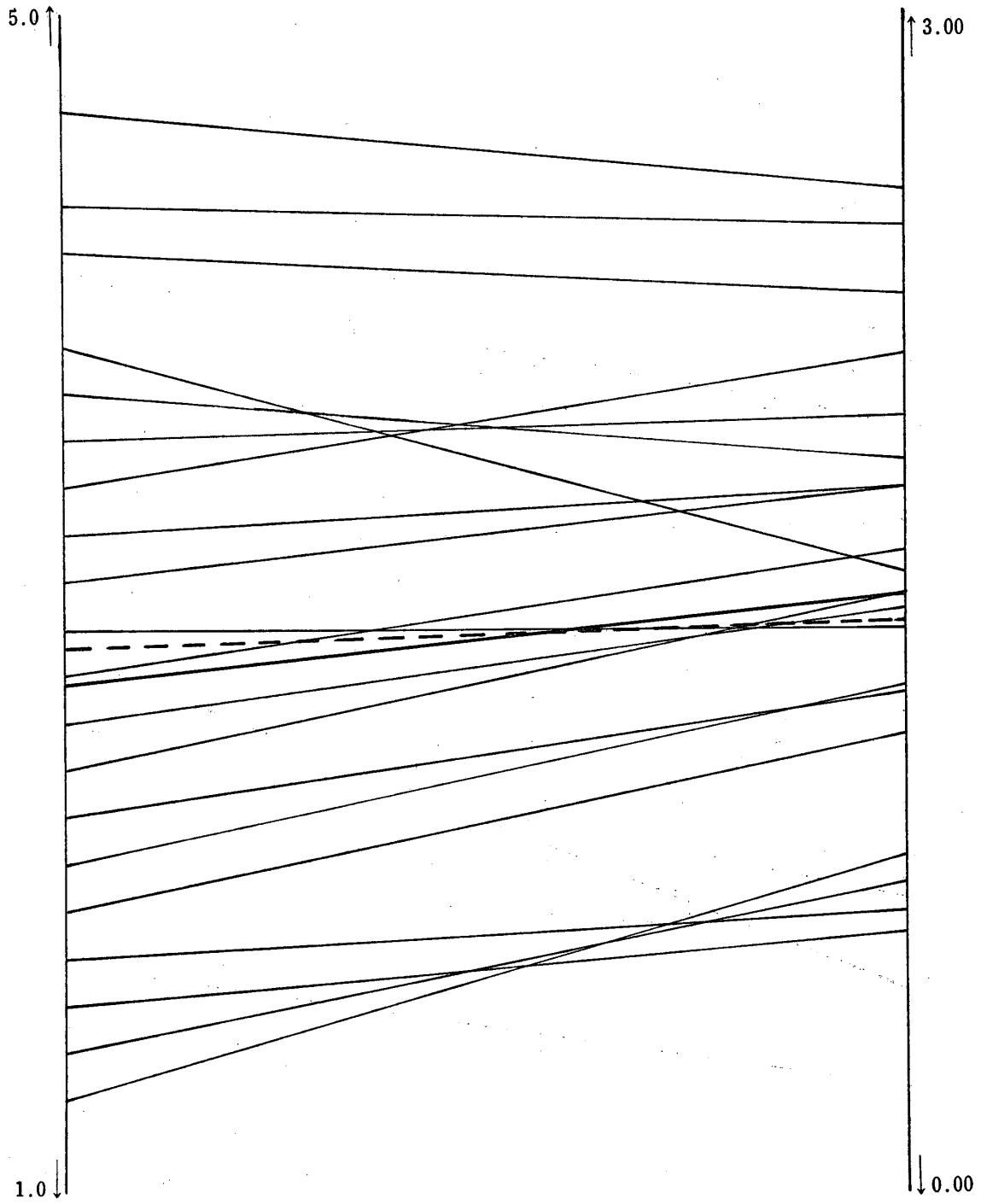


図14 評定平均値平均と学業成績との関係(8)
都内私立校出身者の場合 (83名)

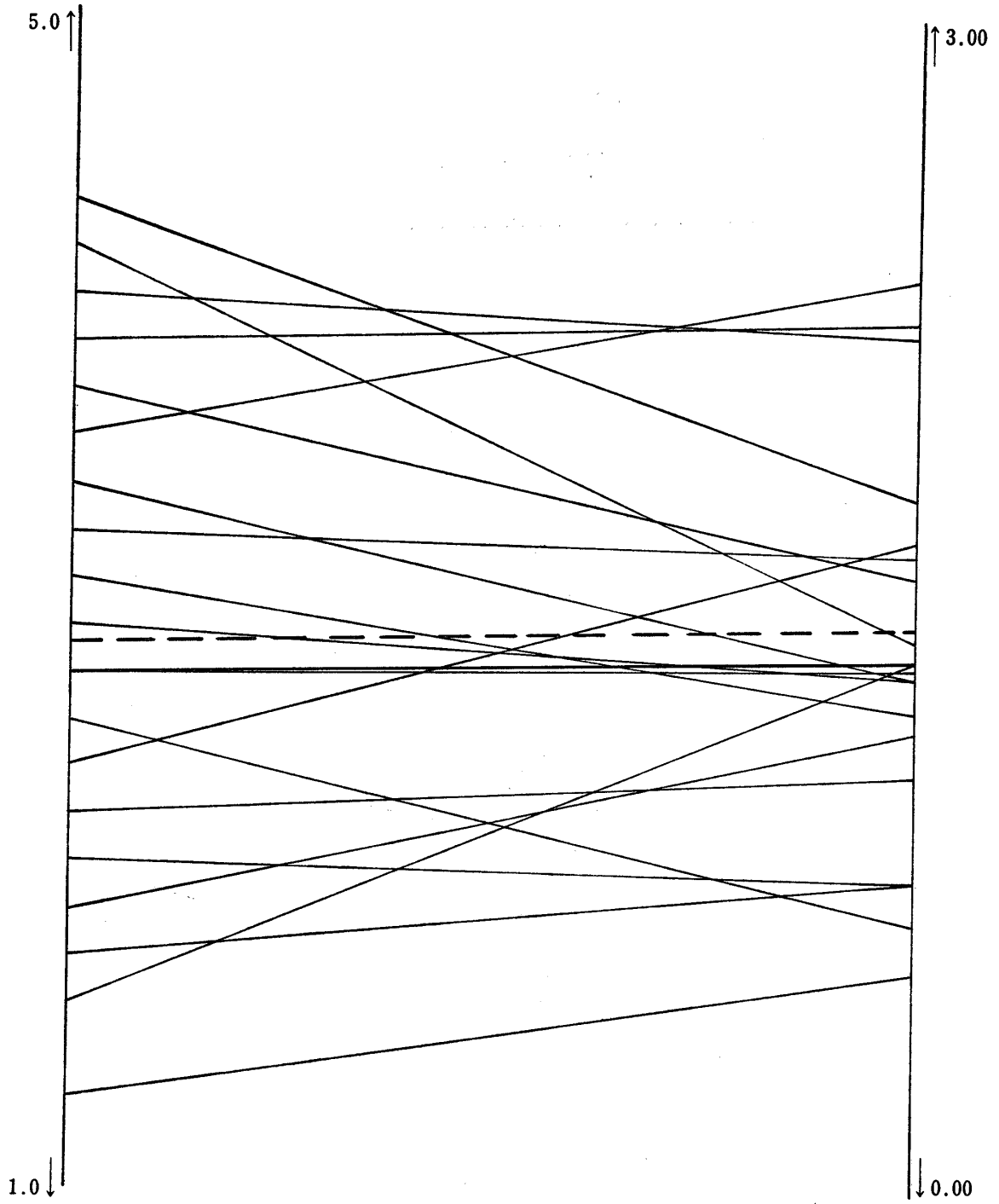


図15 評定平均値平均と学業成績との関係(9)
都外公立校出身者の場合 (198名)

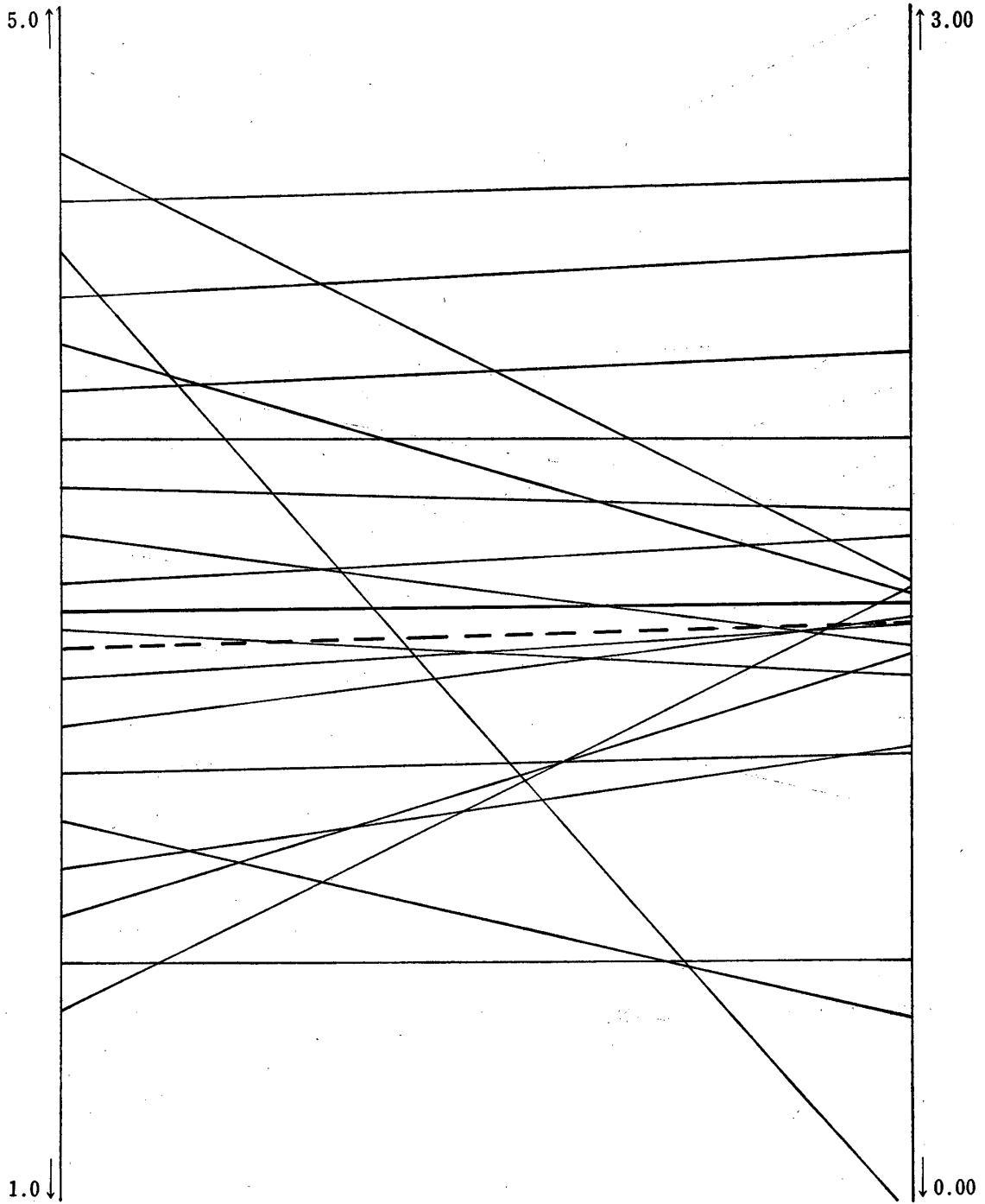
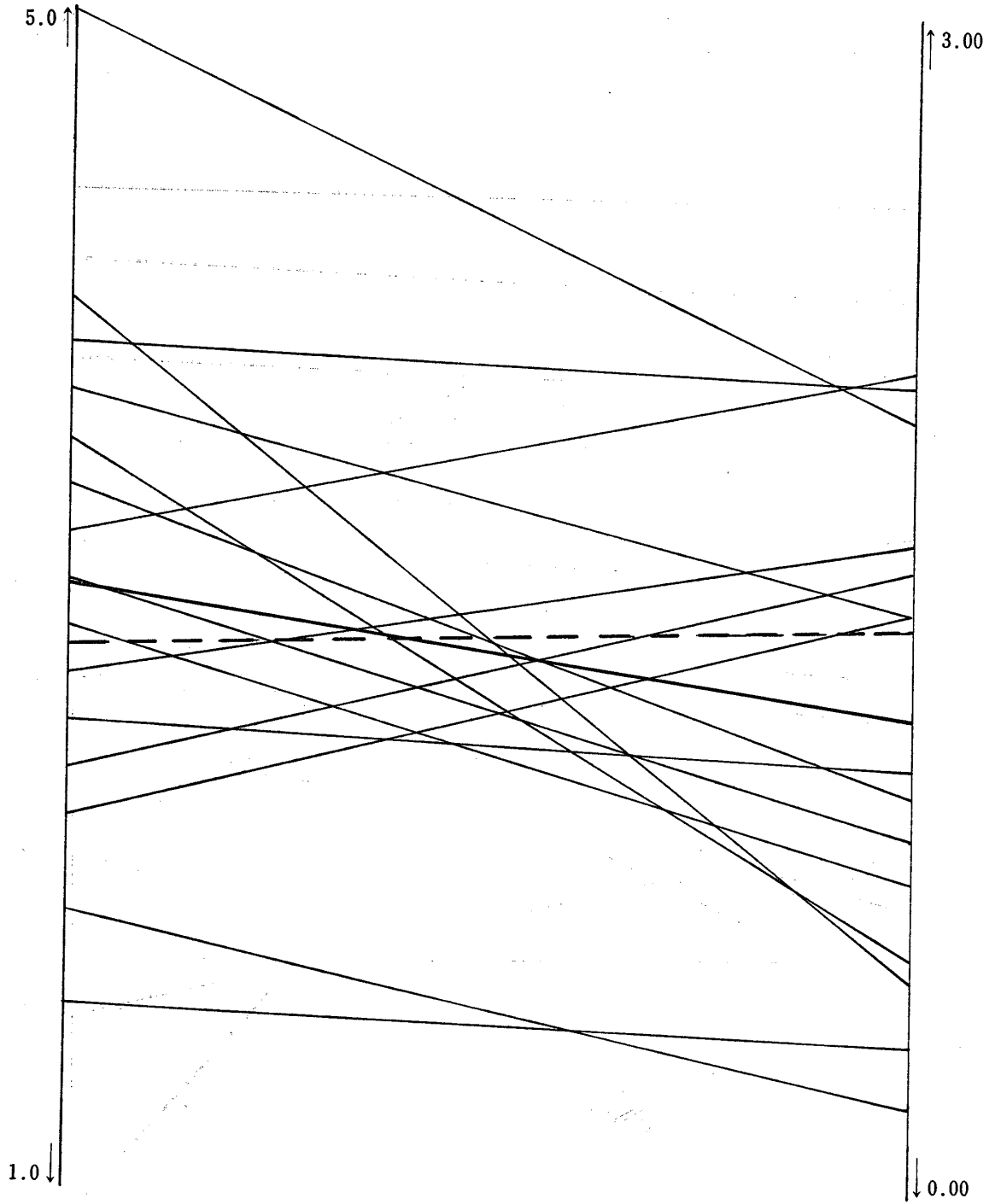


図16 評定平均値平均と学業成績との関係(10)
都外私立校出身者の場合 (42名)



以上の図13～16は、前掲図1～3、7～9同様、1得点段階に1名でも該当者がいる場合、そのすべてを記入しているので図をより複雑にしているわけであるが、これを図4～6、10～12に準じて、1得点段階に該当者が4名以上いる場合に限って図を作成してみると図17～20のようになる。これらの図を見れば、各学校群別の調査書得点と学業成績との関係がより明確にわかるであろう。すなわち、都内公立校出身者の場合は、平均して調査書の成績に近い成績を本学においても残したということである。それは、例えば、この学校群のグループを調査書得点別に上・中・下のグループに3分した場合、それぞれのグループはそのまま学業成績においても上・中・下のグループを形成したという結果をみてもわかるであろう。また、都内私立校出身者の場合は、調査書得点通りの成績を残したグループ、調査書得点に比して若干成績の悪かったグループ、調査書得点に比して成績の良かったグループなど様々であった。さらに、都外公立校出身者の場合は、都内公立校出身者の場合と同様に、概して調査書得点通りの学業成績を残したといえそうである。すなわち、これも調査書得点別に上・中・下位グループと分けた場合、グループ②を除けば、やはり、調査書のグループ分け通りに、学業成績においても上・中・下位グループを形成したのである。最後に都外私立校出身者の場合をみよう。グループの例は少いが、調査書得点通りの成績を残したとは言い難いようである。

これらの結果から一般的にいえることは、公立校出身者に関しては、都内都外を問はず、どの高校の出身であれ、調査書得点相応の成績を残し、いわゆる学校差というものはそれほどに見られなかったという結果であった。また、私立校出身者に関していえば、調査書得点相応の成績を残したものが多くは必ずしもいえず、いわゆる学校差というものがあるように思われたということである。

5. ま と め

以上の調査結果をまとめると次のようになる。

- (1) 入試における成績と本学における学業成績との関係は密接であるとはいえない。すなわち、入試において好成績をあげたからといって本学においても良い学業成績が修められるとは必ずしもいえないということである。本学の学業成績の結果からみれば、良い学業成績を修めたものたちは、入試においてはむしろ成績の良くなかった場合が多いくらいであった。
- (2) 本学における学業成績は、平均してみれば、高校時代の学業成績（調査書得点）と密接に関係していた。
- (3) 調査書得点の高校間格差についていえば、本学における学業成績との関係でみる限り公立高校間にはそれほど差があるとは思えないが、私立高校間および公立と私立の間には若干の差があるように見うけられた。
- (4) 今回の調査結果を前回の調査結果と比較してみると、結論的にはほとんど同一であったとい

図17 評定平均値平均と学業成績との関係(1)
 都内公立校出身者で1段階に該当者が4名以上いる場合

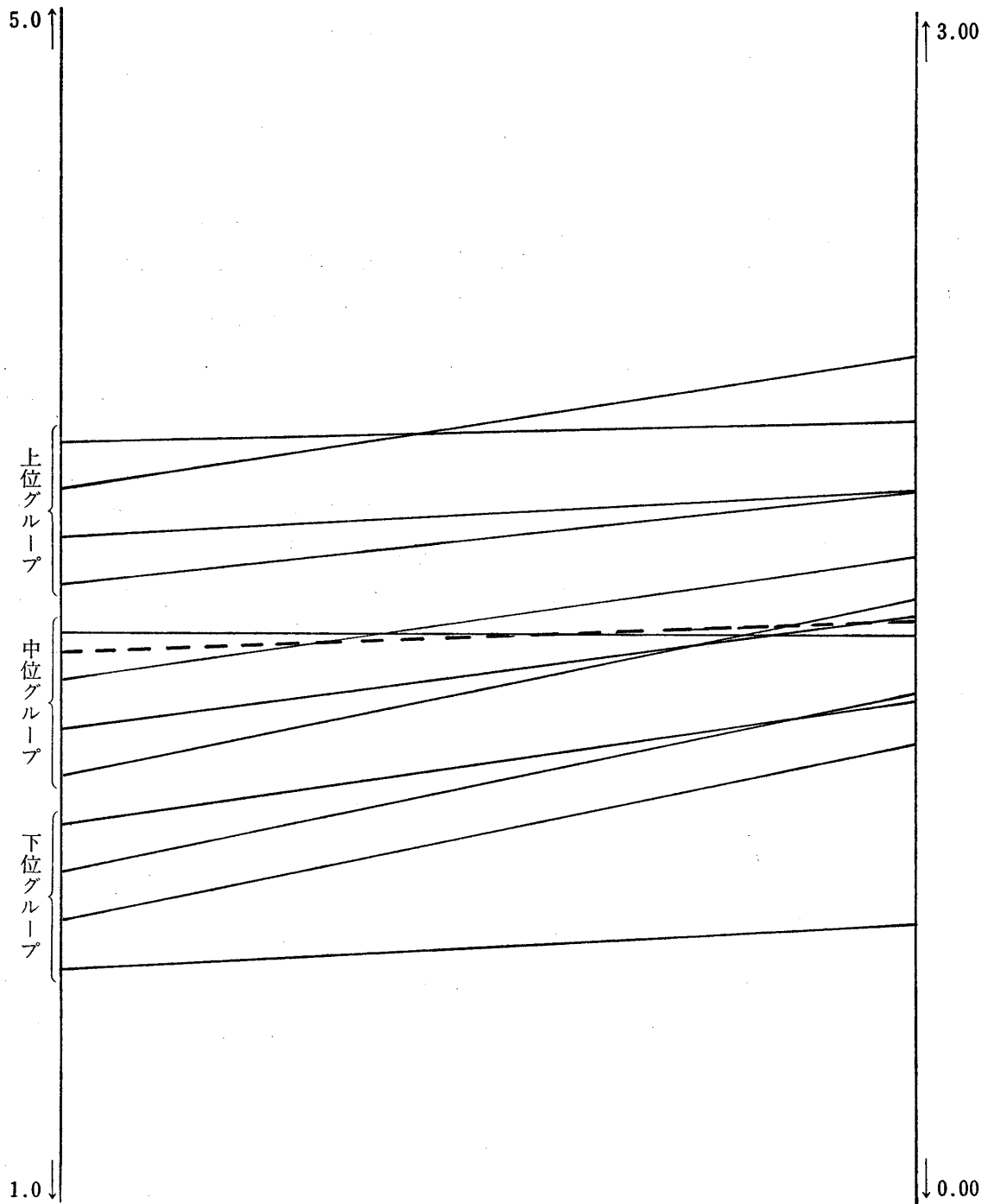


図18 評定平均値平均と学業成績との関係(2)
 都内私立高校出身者で1段階に該当者が4名以上いる場合

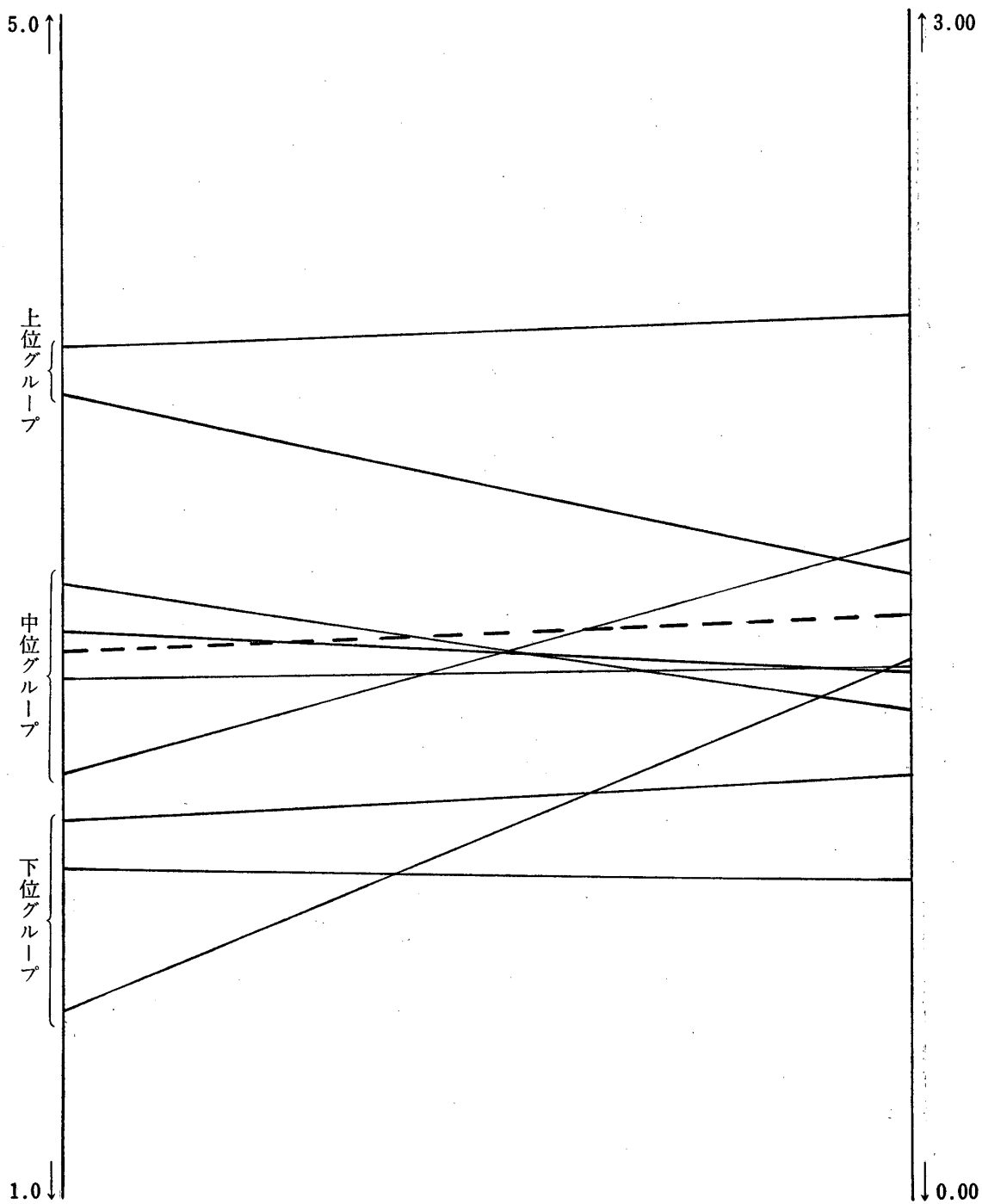


図19 評定平均値平均学業成績との関係(3)
 都外公立校出身者で1段階に該当者が4名以上いる場合

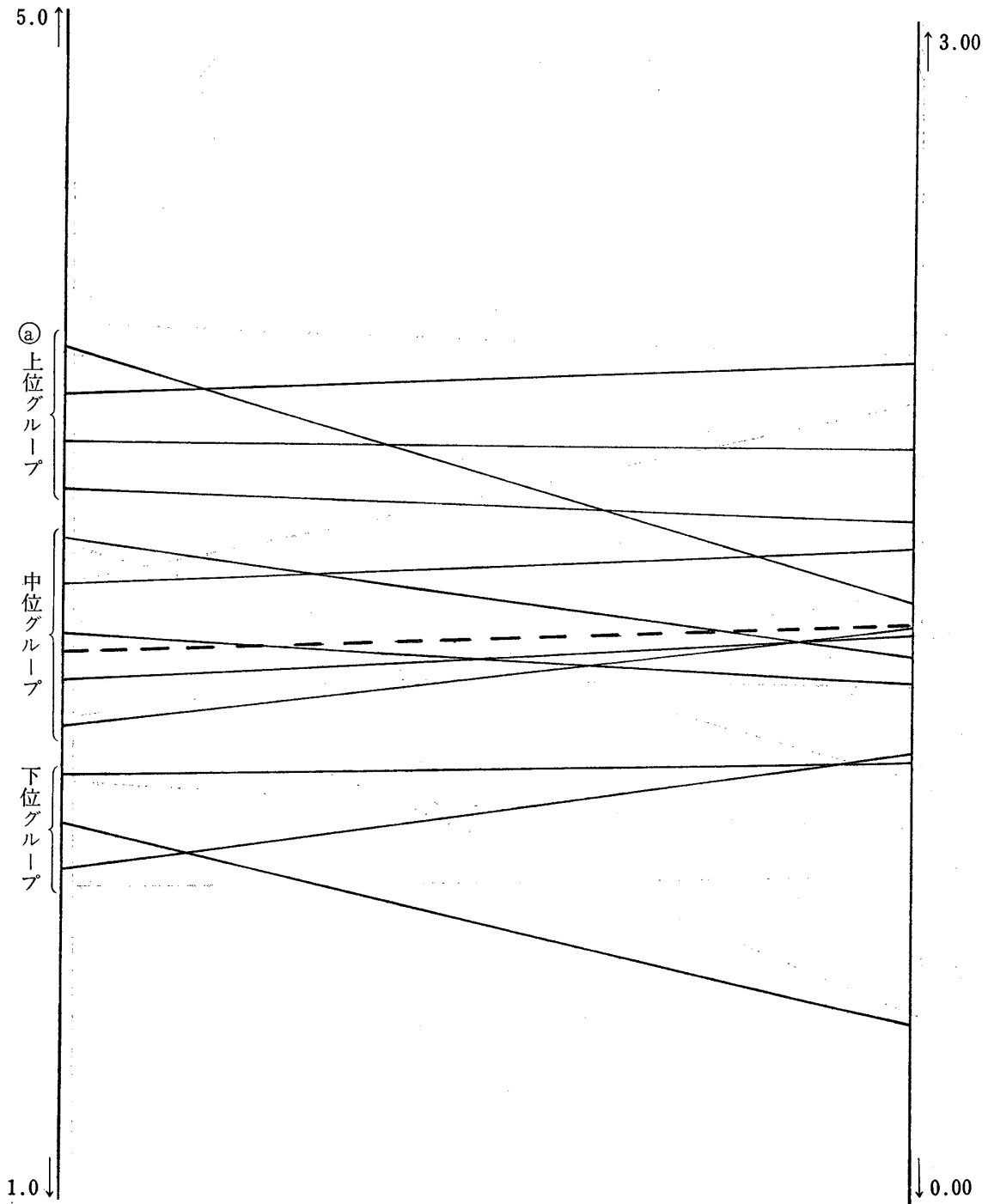
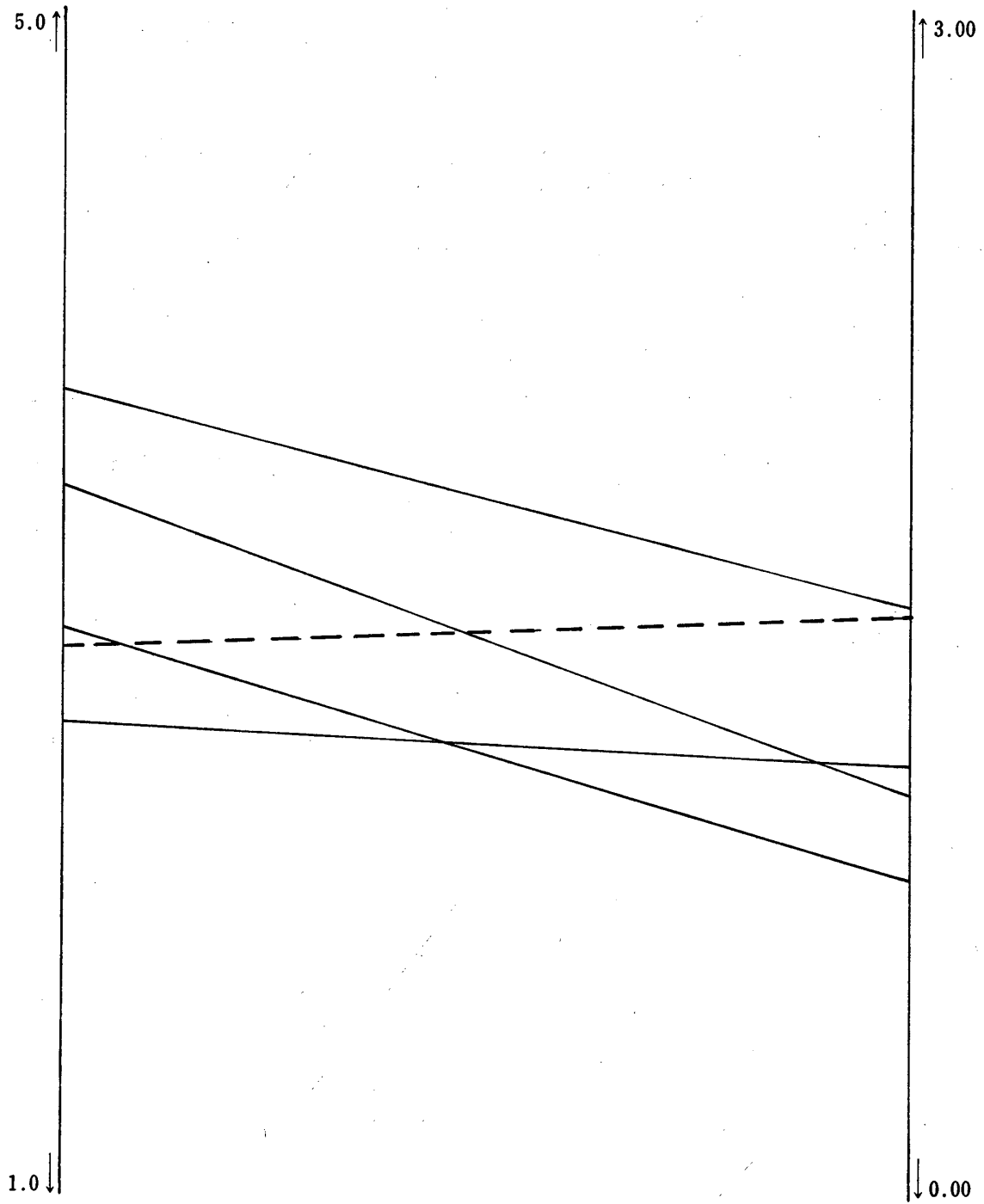


図20 評定平均値平均と学業成績との関係(4)
都外私立校出身者で1段階に該当者が4名以上いる場合



ってよい。つまり、本学における学業成績の結果だけからすれば、一般的には偶然性の強い学力試験という入試よりも調査書を重視した方が良いという結果であった。

従って、前回の報告にも述べたように、⁽⁷⁾ 入学者の選抜にあたっては、その大学の求める学生像を十分に踏まえつつ、単なる学力試験だけではなしに、調査書をより多く参考にするとか、小論文や面接を採り入れるというような、学力試験とは別種のフィルターを課すことが必要だと思われる。

注(1) 本学の入試科目は国語(100点)、英語(100点)の2科目であるが、この他に調査書を最高10点まで加点しているので、厳密には学力試験だけとはいえない。また生活芸術科の場合には作文的要素も若干の割合で採り入れている。

(2) この結果は、あくまでも大都市にある中規模の、入試科目の少ない短大での結果である。

(3) 従って、例えば優が10科目、良が10科目、可が10科目、不可が零とすれば、 $(10 \times 3 + 10 \times 2 + 10 \times 1 + 0) \div 30 = 2.00$ となるわけである。

(4) 注(1)参照、調査書加点分は、評定平均値平均を2倍したものであるなので、たとえ最低が1.0だとしても、2点にはなるわけであるが、しかし実際には1点台のものはいないので最低でも5点は加算されている。

(5) 例えば、入試において、同点者がいた場合、その者たちの学業成績の算出は、合計した優・良・可・不可の数にそれぞれ3・2・1・0を乗じた積の和を科目数の合計で除した商とした。

(6) 入試総合得点において、上位グループと下位グループとは、少人数でありながら、得点のばらつきが著しく図にまとめにくかったので、それぞれ一括したり、2分したりしてその平均点をもってそのグループの得点とした。平均点を出したものは、図1の㊸㊹、図2の㊸㊹、図3の㊸㊹㊺である。

(7) 拙稿：入試成績の追跡研究（跡見学園短期大学紀要第16集）参照。